間で大いに話題をあつめた本である。一つには、それがかの著名なる郭氏の著述であること、一つには、それが文學關係分野の消息をほとんど絶つた文化大革命期五年間のブランクを最初に破つたものであること、更に一つには、その內容が從來の李白杜甫評價に關する「李杜優劣論」の定說をくつがえそうとするものであること、等々の理由によつてである。本書を讀んだ人々の意見は、八十歲という高齡にある郭氏の、なお若々しいエネルギーへの驚嘆と、それが文化大革命の「申し子」的內容をもつ著述であると認める點でほぼ一致する。面白くよませるという感想を抱く點でもほとんど異論はない。しかし、その所說の根據について、論證の方法や議論の展開について、郭氏一流の飛躍性と強引さに危惧を示す點でも、人々は又ほぼ一致する。まさしく「臺風の目」的著述といえよう。

本書の內容についての紹介は、すでにいくつか公けにされている（今村與志雄「古典文學研究への提言、『李白と杜甫』について――」「歷史と人物」中央公論社。昭和四十七年五月號、中島みどり「郭沫若の近著『李白と杜甫』を

郭沫若「李白與杜甫」
北京　人民文學出版社　一九七一年十一月　本文二五〇頁　年表二六頁

これは一九七二年初頭にわが國の中國學關係者專門家の

讀む」アジアレビュー第十號一九七二年夏、森瀬壽三「書評」野草第八號一九七二年八月）などから承知する人も多いであろうし、ここでは詳說をさける。ただ本書が從來の、とくに解放後の中國における杜甫評價を批判する、というよりそれをくつがえすものとしてある關係上、「杜甫研究論文集」一・二・三輯（中華書局　一九六三・四年　北京）に收められている諸論文の論點と傾向について、とくに本書で名指しで批判されることの多い馮至・蕭滌非兩氏の杜甫研究についてもあわせて承知すべきであることを指摘しておきたい。なお、一九六二年、杜甫生誕一千二百五十周年に際し、各國各地で多くの記念行事が行われたが、當時北京における記念大會の開會に當つて、本書の著者郭氏が、杜甫を顯彰する辭をのべていること、その內容が今回批判されている馮・蕭氏らの說く杜甫評價の軌道上にあることも指摘しておきたい（當日の開會の辭に若干加筆したものが、「詩歌史中的雙子星座」という題で、一九六二年六月九日付の光明日報に揭載され、上述「杜甫研究論文集」三輯の卷頭にも收錄されている）。

本書における李白の部分は、評傳的構成に力點がおかれており、後の杜甫の部分における評價顚倒の性格とはやや異なる。周知のように李白は有名であるにもかかわらず傳記的資料にとぼしく、殘された彼の詩句を資料として有機的につなぎあわせる仕事は、卓越した推測力とたしかな考證力を、おそらく杜甫の何十倍も必要とするむつかしい詩人である。したがつて、データーをもたぬ作品として讀者の前に投げ出された彼の諸作品を總括批評した言葉が「南北漫游、求仙訪道、登山臨水、飮酒賦詩」であつたとしても、それはむしろ當然であり、李白好きの人はそうした印象のゆえに李白が大好きなのでもある。そして李白は、ひとり氣ままに無責任に飄然と天地の間を自在浮游した謫仙人、なにがなし根無し草的生き方をした人とみえたとしても、それは讀者の側の責任ではないであろう。何より作詩データーがとぼしく、彼の詩風や詩の內容もそうした印象をつよく與えずにはおかないからである。このようにややマイナス的方向にかたむく李白論に對して、李白好きの郭氏は大いに辯護の說を展開し、新說・新解釋をいくつか打ち出

している。ここではその一つとして、李白の出身家庭に關する氏の説を檢討しておきたい。

李白の父が富商であつたらしいという説はすでに行われていて珍らしくないが、郭氏はそれを更にひろげて李白の兄弟がかなりの商人であつたとする。卽ち、李白の晩年の作「萬憤詞投魏郎中」にみえる一句、「兄九江兮弟三峽」が、「實の兄が九江に、弟が三峽にいた」ことを示すものという前提に立つて、當時の長江中・上流における主要な物産集散港市として九江・三峽を措定し、李白が長期にわたつて漫游、浪費しえたことなどから、その財源としてこの兄弟が富裕な商人——廻船業かなにか——であつたと説く。推測としては面白く、李白の雰圍氣を考える上で暗示にとむが、この説はたとえば李白が鑛山の經營者であつたとする麥朝樞の説（「李白的經濟來源」光明日報文學遺產第四二七期）と同じく、それを決定的に斷定する資料をもたない。更に、李白が「長流夜郎」を途中で赦されて歸つてのち、族叔・李陽冰の家に寄寓して死んだことについて、九江・三峽にいる兄弟に賴らなかつたのは、何らかの理由ですでに兄弟がそこにいなかつたか、李白との間に齟齬が生じていたからだろうという推測となると、一そう根據薄弱である。

郭氏は、李白が商人のくらしになじんでいた證據として、「混游漁商、隱不絕俗」（與賈少公書）や「青雲豪士、散在商釣」（金陵與諸賢送權十一序）という辭句をあげるが、これは林庚が「詩人李白」（古典文學出版社　一九五七年　上海）で指摘するごとく、從來の讀書人の隱棲の常套が「絕俗」すなわち「躬耕」であつたこと、だが李白のそれは新しい市民階層が萌芽的社會を形成しつつあつた城市の中で、絕俗とはちがつた自由な姿で時節到來をまち、機會をまつている、そういう新しさを示す方に重點があるとみた方がよく、兄弟が手廣い廻船業を營んでいたということとは何ら直接には結びつかない言葉である。問題は、李白の生活が商業を基盤にするものだつたかどうかであり、その面をたしかめる可能性を追及すべきである。そしてそれには、かなりたしかな證據がある。

よく知られている通り、李白は生涯にわたつて科擧に應

じた形跡が一度もない。これは彼ほどに才能を自負し、官界に出ることを望んだ人間にしては不可解な事實である。名門貴族でない以上、科擧コースをとる以外にその政治的理想を實現する方法がないことを知らぬはずもないからである。ではなぜ受驗しなかつたのか。それは受驗できなかつたからではないのか。いま、「大唐六典」巻二吏部によると、

凡官人身及同居大功已上親、自執工商、家專其業、皆不得入仕。風疾使酒、不得任侍奉之官。

とあり、同じく巻三戸部にも

辨天下之四人、使各專其業。凡習學文武者爲士。肆力耕桑者爲農。工作貿易（僞唐志貿易作器用）者爲工。屠沽興販者爲商。……工商之家、不得預於士。

という條項がみえる。これらによると工商の出身者は、士にあずかるを得ず、すなわち科擧の受驗資格がはじめからなかつたということになる。まさに李白はそのために受驗できなかつた可能性があるのである。そしてさらに李白が足かけ三年で翰林を追われた理由に、この吏部の「風疾使酒、不得任侍奉之官」の項が適用されたことも又推測可能である。「意識的に理由を作つた」かどうかは別として、侍奉之官にふさわしくない言動が李白に多かつたことはたしかだからである。なお工商のいずれかという點については、やはり林庚が上述の書でいうように、范傳正の李公新墓碑にみえる「自國朝以來、漏於屬籍」という文言は、當時の商人たちがしばしば「年年逐利西復東、姓名不在縣籍中」（張籍「估客樂」）という狀況にあつたのに照らして、それが戸籍もれしやすかつた商人であるか、あるいは商人と見なされていたかを示すという說を傾聽すべきであろう。

正規のルートで出世することを、商戸という理由で社會的に拒否された身分、このことが李白のもつ二面性（功名へのつよい欲望と、又逆にそれを浮雲・糞土のごとしとする面と）を一そう積極的に說明しうる。なお彼は、「六典」にいうところの「文武を習學」しえた點ではたしかに士たる領域に屬する生活をしていたから、それが彼の家の經濟力、文化度を考える上で、一般的工商のそれでなかつたことを推測させるものとなろう。彼の詩にあらわれる親類たち

（それも血つづきなのか、單なる同姓のゆえにそう呼ぶのか、議論のあるところだが）に、かなりの「士」があることからみて、一族の中では李白の一家が特殊に「商」であつたということも可能ではあろう。李白が杜甫とちがつて、玄宗皇帝をあからさまにそしりえたことを郭氏は評價するが、これは體制の中に普通に入ることを拒否された身分ゆえに李白がさめた目をもちえたという點を指摘するなら一そう說得性をもつ。存在が意識を決定するという點に照していえば、李白の平民性、階級的めざめはそれと無關係ではないのである。

郭氏の强引な說のもう一例は、よく知られている「戲贈杜甫」の詩を、これまで僞作としてきたのをしりぞけて、李白の作とし、「借問別來太瘦生、總爲從前作詩苦」は李白が杜甫を諷したのでなくて、親密だつた二人の對話だとするのだが、それを眞作だとするための論證がない。そうしたことが讀者をひどく不安にするのである。

さて、杜詩については、事實關係の解釋のしかたに新しい觀點が行使される。考證が行われるのは、杜詩がいかに本質的に地主階級的生活や觀點を反映しているか、いかに人々がいうところの「人民」的でないかを說くためであるが、議論は性急をまぬがれない。

たとえば杜甫は時に貧しいこともあつたがそれは例外で、本質的には物心兩面の生活を保證された地主のそれであり、成都の草堂の規模のごときは、ひどく大きい莊園であつたではないかという。それにもかかわらず、彼が好んで「牢騷」を發するのは、貧乏顯示症のくせと、莊園の規模を必要以上に擴大しすぎた爲に、人手や經費がかさんでうまくやれなかつたにすぎぬという。しかし、それだけでは、「恒飢稚子色淒涼」（狂夫）「百年粗糲腐儒餐」（賓至）「入門依舊四壁空、老妻睹我顏色同、痴兒不知父子禮、叫怒索飯啼門東」（百憂集行）などといつた詩句のリアリティを片づけてしまうことにやはり無理がある。

この點については、安史の亂後、玄宗行在の時期をもつ成都が、多くの官僚をふくむ避難者でふくれあがり、家賃も高く生活も苦しく、やむなく西郊の人里はなれた不便なところ——從つてその地は廣い——に多くの工面を經驗し

つつ草堂を築いたのであろうとする許同幸の説（「從杜詩中所見之工部草堂」杜詩研究論文集　一輯）の方が、戰爭のみじめさ、つらさを經驗したものにはリアリティをもつてうけとめられるのである。杜甫はたしかに老百姓ではなく、「六典」にいうところの士であり、そうした士が多かれ少かれ體制者（地主）の側に近い環境や體質にあつたことはむしろ當然のことである。それにしてもやはり、力弱き一介の官吏にすぎず、その故に他者を惡どく中傷したり、老百姓を搾取してやまぬ非道な人物だつたということにはならぬであろう。過度に杜甫の「人民性」をいいたてるのは、たしかに正しくないが、又過度に、その功名心と虛榮心、世俗的ないやしさをいい、彼を地主階級の立場に立つ小心な「保皇派」であつたとのみ强調するのも正しくはないのであるまいか。

杜甫の佛教信仰について、郭氏は從來の研究家が無視もしくは抹殺したと批判するが、それは中國內部の研究をみている限りそうかもしれないが、たとえば日本人の研究にはすでに言及があり、杜甫における佛教的要素を排除した杜甫像修正の必要を指摘しているものもある（黑川洋一「杜甫『秋日、夔府詠懷・百韻』における『七祖禪』についての考察」四天王寺女子大學紀要　第一號　昭和四十四年六月）。郭氏はこの詩の中でいう「身許雙峰寺、門求七祖禪」の「七祖禪」について、それを「南宗の荷澤神會」とする說をのべるが、それは上述の黑川氏の論文が、南宗のそれと推定するに當つて行つたほどの考證を示さなければ、なぜそうきめられるのかということは到底わからないし、第一ここでそれを斷定する意味もない。

郭氏は、死ぬまでその迷蒙からさめず、迷信ボケした杜甫は詩聖ならぬ詩佛であり、早くから佛・道の二つに傾倒しながら、佛教（禪）により深く傾いていつたのは、「求佛近而求仙遠、求佛易而成仙難」のゆえに、易きについたからだというが、果してそんなに簡單な說明ですむものであろうか。宗教信仰が所詮迷蒙であるとしても、たとえば佛教と道教のとく宇宙觀・人生觀の要諦に、杜甫が全くふみこまぬままにおろかにも迷信にイカレていたという風にのみ描き出すのは、安手な議論にすぎるのではないだろう

か。郭氏の折角の指摘も、晩年、道教迷信からさめた李白と、佛教迷信からさめなかつた杜甫をいうためにはやはり不充分である。

本書における郭氏の杜甫への批判は、從來の過度の杜甫至聖視への警告として妥當な意見を含んではいよう。だが人々はそれらへの同意、もしくは不同意につけて、結局のところ「文學とは何か」「人民性とは、思想性とは、藝術性とは、ロマンティシズムとは、リアリズムとは」「古典研究はわれわれにとつてどういう意味をもつのか」という、古くて新しい根本問題に立ちもどらざるをえないであろう。ここで筆者は、郭氏の本書が、とくに杜甫の部において、文化大革命的觀點につよく支配されている點で明らかに時期的制約もしくは限界をになつていることを指摘しておきたい。それは十年前の郭氏の杜甫を記念する開會の辭が、まさにその時期の制約の中にあつたのと同じ意味でそうである。そうした特色の中で、いわゆる藝術的基準についての論及が、今回とくに十年前に比べて極度に單純化している點が注目される。すなわち、韻律や對句にこだわつた杜甫の窮屈な格律詩、排律は大衆とは無縁の文字の游戲にすぎず、それは六朝駢體文や明清八股文と同じ系列のものであるとして、それらを形式にこだわる點で一律に非とする意見である。それは十年前の「形式と內容の密度たかい統一」という評價とは兩極をなすものとして提起されていよう。だが、この意見をつきつめていくと、すくなくとも次のような、藝術における二つの基本問題にやがて自己撞着せざるをえぬことになるはずである。つまり、藝術において形式を重視することは果して全く無意味かどうか、もし無意味というならば、それは藝術における表現という行爲を全否定にまでおいつめることなしにはすまないという問題がその一であり、「眞にすぐれた形式とは、そもそもどういうものでなければならず、又ありうるのか」という問題にたちむかう途を自から閉ざしてしまうことになるという問題がその二である。すでにそれは郭氏が、李杜ともにその詩は今日ではもはやそんなに意味がなく、あるとすれば「造反實踐者」であつた蘇渙の存在、及びその詩（わずか三首の詩が現存するのみだが、ほかにすぐれた詩があつただろ

うと推測して）にこそ意義があると強調する點に、その芽はあらわれている。これらの點についても、議論のあるところだが、ここでは本書がなお流動的な内容にあることを指摘しておくに止めたい。

（神戸大學　筧　久美子）